

題： 「ゼルマ」

聖書箇所： コリントの信徒への手紙二 8章9節

あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。

今日は教会暦ではもうアドヴェントの二週目です。私は、毎日がクリスマス、毎日がイースターと思っているので、教会暦にこだわりませんが、今日はアドヴェントを意識して説教致します。アドヴェントとは、元々ラテン語で「到来」を意味します。それはもちろん、イエス・キリストの到来です。現在多くの地域でクリスマスが祝われている12月25日は、元はローマ帝国で冬至の頃に太陽神を祭るミトラ教の祝日でしたが、それが義の太陽なるイエス・キリストの誕生を祝う日となりました。「義の太陽」というのは旧約聖書マラキ書3章20節（新共同訳）に出てきます。こうです。「しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには義の太陽が昇る。その翼にはいやす力がある。あなたたちは牛舎の子牛のように躍り出て跳び回る。」。この様な働きを為し給う義の太陽なるイエス・キリストの誕生する12月25日に向かって、アドヴェントは突進致します。

ところで、「義の太陽なるイエス・キリスト」と言うと、思い出す歌があります。それは、昔、島倉千代子という歌手が歌った「涙の谷間に太陽を」という歌です。1番はこうです。

「流れる涙 あるかぎり／まだ悲しみに 耐えられる／あなたよ 心に燃えている／若いいのちを 信じよう／呼ぼうよ 呼ぼうよ 太陽を／涙の谷間に 太陽を」

私としては、これこそ義の太陽なるイエス・キリストを迎えるアドヴェントの讃美歌として相応しい歌だと思っております。

さて、では、イエス・キリストという義の太陽はどこに輝き給うのでしょうか。以下では、それを良く示してくれると思われる詩を読んでみたいと思います。

岩波ジュニア新書というシリーズがあります。そのシリーズに『ゼルマの詩集』という本があります。ゼルマのフルネームは、ゼルマ・メーアハウム・アイジンガーと言います。彼女はかつてのルーマニア領、現在のウクライナ共和国のチェルノヴィツに1924年8月15日に生まれました。当時のチェルノヴィツの人口は約14万人、その半数近くがユダヤ人でした。この町のユダヤ人はドイツ語を母国語としていました。ゼルマもユダヤ人でした。パウル・ツェランという、これもユダヤ人で、1970年にパリのセーヌ川に投身自殺した詩人もゼルマと同じチェルノヴィツの出身でした。彼はブレーメン文学賞という賞の受賞挨拶で、生まれ故郷チェルノヴィツについて、こう言っています。「そこには人間と書物が生きていた」。チェルノヴィツはそのような町であり、ゼルマはそのような文化的空気を吸って成長致しました。

ゼルマは1942年6月、家族と共にミハイロウスカ強制労働修養所に連行されます。そこは、ナチスの親衛隊によって管理されていました。彼女はそこで、「恐怖と緊張、そして栄養障害で衰弱し発疹チフスにかかり死んでゆきます。18歳と4ヶ月でした。あのアンネ・フランクが死ぬより、二年以上前に死んでいます。彼女は死ぬ一年前に次のような詩を書いています。

悲劇

最も重いことは、自分を投げあたえること、
そして人間とは余計な存在であると知ること、
自分をすっかりあたえること、そして人が煙のように
無に帰してしまうと考えることである。

◆ [注] 赤鉛筆でつぎのように書き添えられている 終わりまで書く時間がなかった。

1941年12月23日 17歳4カ月

彼女はその年の7月7日に、すでに次のような詩を書いてもいました。

ポエム

木々がやわらかな光を浴びている。
風にふるえ、どの木の葉もきらきらしている。
空は青く、絹のようにつやつやとして、
朝風からこぼれた一滴の露のよう。
樅(モミ)の木たちは優しい赤にとりかこまれ
風陛下(カゼノミカ)におじぎしている。
ポプラたちのうしろでは、
微笑(ハヤシ)んであいさつした子どもを
月が眺めている。

風に吹かれ、やぶがとても美しい
銀になったり、つややかな緑になったり、
淡いブロンドの髪に降り注ぐ月の光のようになったり、
ああ、今度はいまにも花咲くかのよう。

わたしは生きたい。
ごらん 生はこんなに鮮やかに輝いている。
生には美しい舞踏会がたくさん、たくさんある
そして多くの唇が待ちうけ、笑い、きらきら輝き、
その喜びを告げている。
あの道をごらん。あの、のぼっていく勾配を
とても広く、明るく、まるでわたしを待ちうけているよう。
そしてわたしを、またあなたをつらぬいて流れる憧れが

どこか遠くでむせび泣き、バイオリンを奏でている。
風が呼びかけながら、森の中をそよそよと流れていく。
風は、生命の歌が聞こえるよ、とわたしに言う。
大気はそよとしてやさしく、冷たい。
遠くのポプラがくりかえし手をふっている。

わたしは生きたい。
わたしは笑い、重荷をふりはらいたい、
そして闘い、愛し、憎みたい、
そして両手で空をつかみたい、
そして自由になって、呼吸し、叫びたい。
わたしは死にたくない。いや！

いやだ。
生は赤い。
生はわたしのもの。
わたしのもの、そしてあなたのもの。
わたしのもの。

なぜ、大砲はうなるの？
なぜ、きらめく王冠のために
生命は死ぬの？

あそこに月が出ている。
月はある。
近くに。
すぐ近くくに。
わたしは待たねばならない。
何を？
山また山をなして、
彼らは死んでいく。
二度と起ち上がることがない。
ない、そして、ない。

わたしは生きたい。
同胞(キョウダイ)よ、あなたもまた。
吐く息が
わたしの、そしてあなたの口から
たちのぼる。

生は鮮やかに輝いている。
あなたはわたしを殺そうとする。
なぜ？
千の笛を吹きならし、
森は泣く。

月は青の中の明るい銀。
ポプラたちは灰色。
そして風がわたしに向かってごうごうと吹く。
道は明るい。
それから・・・
それから彼らがやって来る、
そしてわたしの首を絞める。
わたしを、そして、あなたを
殺す。
生は赤い。
ざわめき、そして笑う。
あっという間に
わたしは
死んでいる。

ひとつの木の、ひとつの影が
月の彼方にさまよっていく。
影はほとんど目に見えない。
ひとつの木。
ひとつの
木。

ひとつの生命は
影を投げるができる——
月の
彼方に。

ひとつの
生命。
山また山をなして、
彼らは死んでいく。
二度と起ち上がることがない。
ない、
そして、
ない。

1941年7月7日 16歳10カ月

このような「助けを求める絶望的な叫び」を書き記していた彼女が、それから5ヶ月後、先程お読みした「悲劇」という詩を書くのです。「自分を投げあたえ」、「人間とは余計な存在であると知り」、「自分をすっかりあたえ」「煙のように無に帰してしまうと考えること」が「重い」というのは、彼女の苦しみを考える時、単なる思いつきで書かれた詩句ないことがわかります。「悲劇」という詩は未完の詩でした。この詩にゼルマが何を付け加えたかったのか、それは想像するしかありません。ゼルマは、「自分を投げ与える」という最も重いことに気付いて、それに「悲劇」という題をつけていますが、私には悲劇どころか幸福な結末だったと思えます。ゼルマの詩は、本日最初に読んだ聖書の言葉、コリントの信徒への手紙 二 8章9節の意味するところを、私たちによく説き明してくれます。

ゼルマの詩を完成してくれるのはイエス・キリストです。イエス・キリストが、ゼルマの悲劇をハッピーエンドに変えてくださいます。「最も重いことは自分を投げ与えること」と言ったとき、ゼルマはイエス・キリストの恵みに正に与っています。「最も重いことは自分を投げ与えること」と言い得たとき、ゼルマは、最も不幸なようであり、実は最も幸福な人でした。ゼルマは、「豊かであったのに、悩める人間のためにのために貧しくなられた」イエス・キリストの貧しさに与った人でした。そこにゼルマの富がありました。

ここに、義の太陽なるイエス・キリストは輝いておられます。それは、徹底的な事自己放棄の貧しさ、絶望的な貧しさの輝きです。このイエス・キリストの貧しさの輝きに照らされる中で、私たちも「自分を投げ与える者」になる恵みに与りたいものです。この恵みとは、まことに今死んでもよいという幸福な恵みです。イエス・キリストを見つめ、イエス・キリストと語り合い、交わる生活の中で、私たちはきっとこの恵みに与ることが出来ます。私たちの日々も、実にゼルマの「悲劇」という詩のごとく、常に未完です。しかし、常にイエス・キリストがその未完の日々を完成に導き続けてくださいます。今日この時か

ら、そのようなイエス・キリストの光の中を歩みたいものです。

祈り

神様、このけち臭い生き方をしている私を「自分を投げ与えることができる」光の中へと導いてください。この祈り、主イエス・キリストの御名によって御前にお捧げ致します。